

【三彩・緑釉】

日本の緑釉・三彩陶器の流れ

Transition of Green-Glazed Pottery and Tricolored Pottery in Japan

齊藤孝正

はじめに

- ① 緑釉陶器の創出
- ② 三彩陶器(奈良三彩)の出現
- ③ 正倉院三彩
- ④ 平安時代の緑釉陶器

【論文要旨】

日本における施釉陶器の成立は7世紀後半における緑釉陶器生産の開始を始まりとする。かつては唐三彩の影響下に奈良時代に成立した三彩(奈良三彩)を以て、緑釉と同時に発生したとする考え方が有力であったが、今日では川原寺出土の緑釉波文埴や藤原京出土の緑釉円面硯などの資料から、朝鮮半島南部の技術を導入して緑釉陶器が奈良三彩に先行して成立したとする考え方が一般化しつつある。なおこの時期の製品は埴や円面硯などの極僅かな器種が知られるのみである。奈良時代に入ると新たに奈良三彩が登場する。唐三彩は既に7世紀末には早くも日本に舶載されていたことが近年明らかにされたが、新たに三彩技術を中国より導入し成立したと考えられる。年代の判明する最古の資料は神亀6年(729)銘の墓誌を伴う小治田安万呂墓出土の三彩小壺であるが、その開始が奈良時代初めに遡る可能性は十分に存在する。奈良三彩の器形は唐三彩を直接模倣したものはほとんど見られず従来の須恵器や土師器、あるいは金属製品に由来するものが主体となる。ここに従来日本に存在しなかった器形のみを新たに直接模倣するという中国陶磁に対する日本の基本的な受け入れ方を見て取ることができる。奈良三彩は寺院・宮殿・官衙を中心に出土し国家や貴族が行なう祭祀・儀式や高級火葬蔵壺器として用いられた。なお、先の緑釉陶器の含め三彩陶器を生産した窯跡は未発見である。平安時代に入ると三彩陶器で中心をなした緑釉のみが残り、越州窯青磁を主体とする新たな舶載陶磁器の影響下に碗・皿類を主体とする新たな緑釉陶器生産が展開する。生産地もそれまでの平安京近郊から次第に尾張の猿投窯や近江の蒲生窯などに拡散し、近年では長門周防における生産も確実視されるようになった。中でも猿投窯においては華麗な宝相華文を陰刻した最高級の製品を作り出して日本各地に供給しその生産の中心地となった。

はじめに

日本におけるやきもの本格的な歴史が開始されるのは古墳時代に始まる須恵器生産からである。須恵器は5世紀中頃までに、日本に初めて朝鮮半島南部の新羅・伽耶・百済地域から炆器（陶器質土器）の技術が伝えられ、従来の土師器などの素焼き土器とは全く異なる革新的なやきものとして生産が開始された。この須恵器にみられる特徴は、轆轤を用いた成形技法と窖窯と呼ばれる構造窯を用いた1000℃～1100℃という温度による還元焰高火度焼成の技術である。しかし、まだ釉薬は用いられず焼き締めただけの陶磁器の分類上は炆器に属するやきものであるが、還元焰焼成により耐火度の高い粘土は鉄分が還元されて鼠色となり、器表には自然に降り掛かった木灰が溶けてガラス化した緑色の自然釉がみられるものも多く存在する。

①……………緑釉陶器の創出

飛鳥時代の7世紀後半になると、日本で最初に人工的な釉薬を用いた焼き物即ち陶器が新たに作り出されるようになる。この陶器は基礎釉として鉛を溶媒剤として用いた鉛釉を施し、800℃から850℃位の低火度焼成による鉛釉陶器で、このうち最初に登場するのは鉛釉の呈色剤に銅を用いた緑釉陶器である。これまでは奈良時代になり唐三彩の影響下に日本でも三彩陶器（唐三彩と区別して奈良三彩とも呼ばれる）とこの緑釉陶器が同時に作られるようになったと考えられていたが、田中琢が奈良県・川原寺の発掘調査で出土した緑釉波文埴の存在に注目し、これを創建当初の壁面装飾に用いられたものと考え、その製作年代を7世紀後半に遡るとし、従来の三彩と緑釉が同時に発生したという考え方に再考を迫ったのであった〔田中1974〕。加えて近年の発掘調査で7世紀末に比定される大阪府南河内郡河南町・塚廻古墳の石室内から出土した緑釉陶製棺外容器あるいは棺台と考えられる資料が出土し、榑崎彰一は積極的に緑釉陶器先行説を主張している〔榑崎1977, 1979a, 1990〕。さらに最近の奈良県・藤原京の発掘調査により新羅産緑釉陶器とともに、日本産緑釉陶器（円面硯）が出土していることが知られるようになってきている〔巽1998〕。このような状況から今日では須恵器と同じく朝鮮半島南部の技術を導入してまず緑釉陶器の製作が始められたものと考えられる。この緑釉陶器の創出は須恵器の出現に続く大きな技術革新であるが、この時期に作られた製品は極めて僅かであったと思われ、今日確認されている器種には、上述した埴・棺外容器（棺台）〔榑崎1998では朝鮮半島産としている〕・円面硯が知られるのみである。また緑釉陶器を製作した窯跡についても現在までのところ全く不明である。

②……………三彩陶器(奈良三彩)の出現

この緑釉陶器にやや遅れて登場するのが三彩陶器である。これは三重県・繩生廃寺出土碗などの資料に見られるように7世紀末には日本にももたらされ全国各地で出土している中国唐三彩の影響下に、新たに三彩技術を中国より導入して奈良時代に入って作られるようになったものであり、こ

れにより本格的な鉛釉陶器の生産が開始され、艶やかな光沢と色鮮やかな色彩を兼ね備えた焼き物が生み出されたのである。三彩陶器は基本的に素焼きを行った後に緑釉陶器と同じく鉛釉を施した低火度焼成による鉛釉陶器で、その呈色剤には緑釉と同じく緑色の銅に加え、黄色・褐色には鉄が用いられ、白色には無色の透明釉がそのまま用いられている。これらの釉薬を組み合わせて褐・緑・白の三彩、緑・白の二彩、単色の黄釉・白釉・緑釉が作り出されたのであるが、奈良時代後半には緑・白の二彩が主体となり、平安時代以降は後述するように緑釉のみが作り続けられる。なお奈良三彩には唐三彩に見られる素地に白泥を化粧掛けする技法がないとされてきたが [巽 1985]、近年の発掘調査による出土資料や伝世資料などで化粧掛けを施すものが知られるようになってきている [齊藤 1998]。三彩を含む鉛釉陶器については日本ではいずれにしても緑釉が中心であり、そこに日本人の緑色に対する格別な思いを読みとることが出来る。

年代の判明する最古の三彩陶器は、神亀6年(729)銘の墓誌を伴う小治田安万呂墓出土の三彩小壺が知られており、これにより遅くとも720年代までには確実に三彩陶器の製作が開始されていたことが知られる。しかしながら、これよりも丸底で高台を有せず丸い胴に二重沈線が4段に廻らされる、より古い形式の大府府茨木市安威大職冠山出土の三彩壺(重要文化財・東京国立博物館蔵)などが存在しており、奈良時代初め頃まで遡る可能性は十分考えられる。この大職冠山出土三彩壺に次ぐのが神奈川県川崎市登戸出土と伝えられる三彩壺(重要文化財・個人蔵)で、丸い胴に二重沈線が4段に廻り高い高台が付けられ光沢のある鮮やかな三彩釉が掛けられ、三彩壺を代表する優品である。これに丸い胴に二重沈線が廻らされなくなる和歌山県高野口出土の三彩壺(重要文化財・京都国立博物館蔵)や奈良県生駒郡出土と伝えられる三彩壺(重要文化財・大阪市立東洋陶磁美術館蔵)が続く。なお前者の三彩壺は鉄分が多く褐色を呈する素地に光沢のない三彩釉が掛けられており異色な作風を示している。これらに続いて緑釉が主体となり胴がやや長くなり高台が低くなる岡山県津山市出土と伝える三彩壺(重要文化財・倉敷考古館蔵)へと変遷していくと考えられる [齊藤 1998]。

三彩陶器の器形は、直接の手本とした唐三彩の器形をそのまま模倣したものはほとんど見られず、日常容器である従来の焼き物の須恵器や土師器と同じ器形のものや、佐波里や金銅製の金属器としての仏具を模したものが主体であり、壺・瓶・甕・杯・鉢・盤・椀・皿・托・火舎・合子・硯・塔などの器形が知られている。このうち浄瓶・合子・火舎は佐波里・響銅などの金属製仏具を模倣したものであり、多口瓶は金属器の花瓶を変形させたものと推測され、椀や皿は須恵器や土師器に、広口短頸壺・甕・杯・鉢・盤は須恵器の器形から展開したものである。

三彩陶器の出土は、寺院遺跡が最も多く、集落遺跡や宮殿・官衙遺跡、墳墓遺跡、祭祀遺跡などから出土している [巽 1985, 愛知県陶磁資料館他 1998]。なお、近年集落遺跡からの出土例が増加しているが、基本的には寺院・宮殿・官衙を中心に出土していることに変わりはない。このように三彩陶器は国家や貴族が行う祭祀・仏教儀式に使用されたり、壺は高級な火葬蔵骨器として用いられるなど、希少なものとして極めて特別な時に使用されたと考えられている。これは直接の手本とした唐三彩が墳墓に副葬される明器であるのに対し、際違った違いを見せている。この点は先の奈良三彩の器形について、その祖形や系譜を見ても同様な状況が認められる。唐三彩に見られる藍釉や交胎技法の欠落など技術的な制約を別にしても、唐三彩に系譜が求められるのは僅かに鼓胴・陶

枕・長頸瓶という従来日本には全く存在しなかった器形に限られ、基本的にはそれまでの須恵器や土師器、金属器としての仏具を模した器形に三彩釉・二彩釉・緑釉・黄釉・白釉などを施したのであり、唐三彩の器形の厳密な模倣は必要とされていないのである。ここに従来日本に存在しなかった器形のみを新たに直接的に模倣するという中国陶磁に対する日本の基本的な受け入れ方を見て取ることが出来る。

三彩陶器は奈良時代に製作された緑釉陶器と同じく平城京内の官営工房において独占的に直接製作されたと考えられているが、須恵器とは異なり低火度の酸化焰にて焼成するため小型の平窯を用いていたと考えられるため窯跡は未発見である。なお近年二彩陶器片を出土した平安時代初期（長岡京期）の窯跡が京都市北部において唯一確認されている。

③……………正倉院三彩

ところで、この三彩陶器を最も代表するのが、奈良県・正倉院に伝来する57点の正倉院三彩である。これらの彩釉陶器は全て南倉に納められており、現在まで伝来した世界最古の陶磁器として著名な作品で、塔[1]・瓶[1]・大平鉢[3]・鉢[25]・鼓胴[1]・大皿[10]・平鉢[6]・碗[10]の器種があり、三彩[5]・二彩[35]・緑釉[12]・黄釉[3]・白釉[2]の釉薬が用いられているが緑・白の二彩が主体となっている。これらの作品は、天平勝宝4年(752)4月9日東大寺大仏開眼会から神護景雲2年(768)4月3日称徳天皇東大寺行幸までの諸儀式に使用され、東大寺絹索院に納められていたものが、天曆4年(950)7月に正倉院南倉に移されたものである。

昭和37年から3カ年、小山富士夫・加藤土師萌・田中作太郎・藤岡了一・山崎一雄・榎崎彰一が詳細な調査を行ない詳細な報告が行われている[宮内庁正倉院事務所1971]。それによれば、釉薬は全て筆により時間をかけて丁寧に塗り分けられ、基本的には最初に緑釉を、次に黄釉を、最後に残りの隙間を白釉で埋めて三彩としている。文様も極めて単純で典型的であり、唐三彩のように貼花文は認められず、鹿子風の斑点文が最も多く、他に網目・線條・麻葉風のものも認められる。これらの作品は全て素焼きを行ない、その素地に釉薬をかけ二次焼成を行っている。この調査により、長年の舶載品(唐三彩)か日本製(奈良三彩)かの論争に終止符が打たれ全て日本製であることが判明したのである。

正倉院文書『造物所作物帳』を研究した福山敏男は、これが天平5年(733)から1カ年に渡り行われた奈良県興福寺西金堂の造営に関する文献であることを明らかにしたが[福山1943]、そこには三彩陶器製作に関する次のような記述が残されている。

[推定上巻]

瓷坏料土二千五十斤 自肩野運車五両
賃銭 四百文 車別八十文
瓷坏燃料薪橡三百七十四材 自山口運車六十七両
賃銭一貫四百七十四文 車別廿二文

[推定中巻]

用黒鉛九百八十三斤 熬得丹小一千一百五十八斤

朱沙小八両 赤玉料

緑青小十七斤九両 青玉并黒玉料

麒麟血小七両一分 赤刺玉染料

柒九合 黒刺玉染料

胡麻油一升 刺玉形土作調度

猪脂九升三合 鉛熬調度

塩一斗三升五合 鉛暗料

墨六十四匁 刺玉形塗料

紙卅八張 雑用料

繩三尺 雑篩料

帛四尺 麒麟血染調度

薄繩四尺 雑篩料

調布三丈二尺 雑巾并冠等料

商布二丈四尺 雑巾料

白革一張 玉工等構料

破瓶十四顆 刺玉形塗料

赤土小三斤 二升玉合料

白石二百卅斤 玉合料

土三百六十斤 玉和合壺料

河内国石川郡土

可路草莖二百八十把 刺玉調度

炭二万一千六百斤 玉作料

薪二百四束 鉛熬料

右件造玉并料用物具如前

造瓷埴四口 別口径八寸

瓷油坏三千一百口 別口径四寸

用黒鉛一百九十九斤 熬得丹小二百卅四斤

緑青小十七斤八両 丹和合料

赤土小一斤四両 一升丹和合料

白石六十斤 丹和合料

猪脂一升 鉛熬調度

塩二升七合 鉛暗料

膠二斤四両 丹并緑青等和合料

紗四尺 丹篩料

繩三尺 石篩料

葛布六尺 土篩料
(以下闕失)

この記述を科学的に分析した山崎一雄は次のように解釈した〔加藤・山崎1971〕。黒鉛（金属鉛）を加熱融解し酸化して鉛丹（酸化鉛）を作り出す。そこに丹和合料として白石（石英）を加えると珪酸鉛（鉛ガラスに近い組成の基礎透明釉）が出来る。これに、緑青を加えると緑釉となり、赤土（鉄分の多い土）を加えると黄釉・褐釉となる。この3種類の釉を掛ければ三彩を作り出すことが出来る。なお、膠は素焼きした素地に釉薬を掛ける際の接着剤であり、塩は鉛を擦り潰して細粉にするために、猪（豚）脂は鉛丹を作る際に鉛の酸化を促進するために用いたものである。ところで、これら各種釉の組成を推定計算し、実際の奈良時代の三彩や緑釉と比較してみると、極めて近似していることが明らかにされている。

④……………平安時代の緑釉陶器

平安時代になると新たな中国唐時代の白磁や越州窯青磁の碗皿類が多数舶載されるようになり、平安京や北部九州を中心に全国各地で数多く出土するようになる。これにより供膳具は須恵器や三彩陶器に見られた金属器を志向したものから、これらの中国陶磁を志向したものへと大きく転換していくのである。これらの越州窯青磁を主とする新たな中国陶磁の影響を受け、その代替品として、色彩が近い従来の鉛釉である緑釉陶器で碗・皿などの新器種を製作するようになるが、その生産の中心となったのは初期には平安京近郊の洛北窯であり、後には平安京近郊の洛西窯とともに尾張にも生産が拡大し、愛知県・猿投窯や尾北窯において灰釉陶器とともに生産され華麗な宝相華文を陰刻する最高級の作品も多数製作された。また近年の発掘調査により窯跡は未発見であるが、山口県の長門・周防においても在地や北部九州向けの生産が行われていたことが確実視されるようになってきている。10世紀にはいると滋賀県・蒲生窯や京都府・丹波の篠窯において畿内の需要の増大にともない碗・皿類が量産されるようになり、10世紀後半には東海地方では岐阜県・美濃窯や愛知県・二川窯で生産が開始されていったが、11世紀初めには緑釉陶器の生産は終焉を迎えている。平安時代の緑釉陶器は量産を志向したため素地を須恵器と同じ窖窯で焼成し、緑釉の施釉は畿内に所在する窯跡では2～3メートル程度の小型平窯で、東海地方の古窯跡群では窖窯で灰釉陶器と併焼している。

平安時代初期（長岡京時代）に洛北窯で生産された緑釉陶器には、軟質の素地に緑釉が施されたものが多く鉢・花瓶・壺・平高台碗・羽釜・釜・竈などの特異な器種の作品が存在することが近年の発掘調査の成果により知られるようになってきている。巽淳一郎はこのうち平高台碗・羽釜・釜・竈を中国から伝わった喫茶（団茶）に用いた器形と考えている。9世紀前半代になると供膳具である碗・皿類を中心とする緑釉陶器の生産が確立し、畿内では洛西窯が、東海地方では尾張の猿投窯が主体となる。生産の中心となったのは猿投窯で、極めて多数の器種が作り出されている。具体的に器種をあげてみると、碗・輪花碗・皿・輪花皿・稜碗・稜皿・段皿・輪花段皿・耳皿・三足盤・托・合子・香炉・火舎・唾壺・四足壺・短頸壺・手付瓶・小瓶・高盤・花瓶・水注・陶枕など

がある。これらの器形は猿投窯の灰釉陶器と同じく、伝統的な須恵器の系譜を引く長頸瓶・広口短頸壺・平瓶、金属製仏具を模倣した原始灰釉陶器の系譜を引く水瓶・浄瓶・花瓶、新たな中国陶磁の器形を模倣した椀・皿・稜椀・稜皿・段皿・耳皿・手付瓶・手付小瓶・水注・合子・唾壺・托・四足壺・香炉などであるが、中心となったのは供膳具である椀・皿類である。

初現期の椀の形態は灰釉陶器を含めて緑釉陶器とも体部に丸みを持ち口縁端部を大きく外反させ水平に引き出し、細長い付高台を有するものであり、金属器範に共通する特徴が見られるが、蓋を伴わない点は中国陶磁の椀に共通している。皿の形態は椀と同じく口縁端部を大きく外反させ水平に引き出し、細長い付高台を有するものであり、やはり金属器皿に類似する特徴が認められる。稜椀・稜皿は緑釉陶器が主体となるが稜椀の一部に蓋を伴うものもあり、形態的には金属製仏具に類似する特徴も認められている。徳利状の胴部に板状の把手を付けた手付瓶やそれを小型にした手付小瓶は初現期のものにはへらで面取り成形した注口が付けられた手付水注の形態をなし、越州窯青磁の小型手付水注を模倣した器形であるが、大型の製品が主体となりすぐに注口が消失してしまい日本的な手付瓶へと展開していく。四足壺は平底でやや偏平な広口短頸壺に近い胴部に縦たがから続く足を四方につけたもので本来は蓋を伴う。これも越州窯青磁の縦たがのみを有する四足壺を模倣した器形であるが、越州窯青磁のものは小型である。手付瓶と同じく初現期には比較的忠実に形態を模倣して縦たがのみを廻らせるが、すぐに大型化し横たがもが廻らされるようになり日本的な四足壺へと展開していく。手付水注は、長胴の肩が張る胴部にやや高い高台、長い注口、板状の把手（一部には紐状もある）を有するもので、北宋後半の白磁水注に祖形が求められているが、白磁に比べて全体に細身であり日本的な器形となっている。

緑釉陶器の場合も灰釉陶器を含めて、三彩陶器の場合と同様に手本となった越州窯青磁や唐白磁の器形を直接模倣するのは従来日本には存在しなかった、手付水注・四足壺・合子・唾壺・香炉・双耳壺・陶枕などの一部の器種に限られており、椀・皿などの従来から馴染みのあった器種は金属器などの伝統的な形態の延長線上に展開したものである。また灰釉・緑釉陶器とともに出現する椀・皿類重ね焼きのための窯道具（支持具）として用いられる三又トチンについても正倉院三彩陶器に比較的猿投窯のものに近い大きさの三又トチン痕跡が確認され、この三彩陶器の技法から技術導入された可能性が強いと考えられる。ここでも器形の厳密な模倣は必須の要件ではなく、従来日本には存在しなかった器形のみを新たに直接的に模倣するという中国陶磁に対する日本の基本的な受け入れ方を見て取ることが出来るのである [齊藤 1992]。

この時期の緑釉陶器の特徴として、猿投窯を中心に越州窯青磁や金属器にみられる毛彫り文様と同じく流麗な宝相華文・飛雲文・蝶文を主とする陰刻の毛彫り文様を施すものが数多く作られている。これらの宝相華文を主体とする陰刻文様は猿投窯の初現期からすでに定型化した精緻なものであり、五代時代を中心に宝相華文・飛雲文・蝶文などが自由でのびやかに施された越州窯青磁とは盛行した年代が異なり、日本の金工品に類似する資料も極僅かであるが知られており、同時代の金工品からの影響を考慮しておきたい [齊藤 1992]。なお、一部に陰刻の毛彫り文様に替わり、淡緑色の緑釉地に濃緑色の緑釉で宝相華文様を筆描する製品（緑釉緑彩陶器あるいは白釉緑彩陶器、檜崎彰一は平安時代の二彩陶器とする）も知られている。

猿投窯の緑釉陶器では白色の素地に淡い温かみのある緑色の緑釉が厚く艶やかに掛けられ、国産

陶器の中では最高級の製品を作り出している。10世紀に入ると東海地方では猿投窯に代わって岐阜県・美濃窯が、畿内では篠窯や近江の蒲生窯が中心となり、器種も再び減少し、椀・皿・段皿・耳皿・水注・香炉などに限定されてくる。

平安時代の緑釉陶器は、奈良時代の三彩陶器に比べてより広範囲に使用されるようになり、近年の発掘調査により東日本の大規模集落遺跡などから多数出土する状況が明らかになりつつあるが、依然として基本的には宮殿・官衙・貴族邸宅・寺院などでの祭祀や儀式に使用されたものと考えられている。

引用・参考文献

- 福山敏男 1943「奈良時代に於ける興福寺西金堂の造営」『日本建築史の研究』所収
宮内庁正倉院事務所・編 1971『正倉院の陶器』日本経済新聞社
加藤土師萌・山崎一雄 1971「正倉院彩釉陶の技術的ならびに科学的考察」『正倉院の陶器』53～69頁、日本経済新聞社
田中琢 1974「鉛釉陶の生産と官営工房」『日本の三彩と緑釉』217～222頁、五島美術館
五島美術館・編 1974『日本の三彩と緑釉』五島美術館
榎崎彰一 1977『三彩 緑釉』中央公論社
田中琢 1979「三彩・緑釉」『世界陶磁全集』2, 245～251頁、小学館
榎崎彰一 a 1979「日本古代の土器・陶器」『世界陶磁全集』2, 133～143頁、小学館
榎崎彰一 b 1979「正倉院陶器」『世界陶磁全集』2, 252～264頁、小学館
榎崎彰一 c 1979「平安時代の施釉陶」『世界陶磁全集』2, 265～280頁、小学館
巽淳一郎 1985『陶磁（原始 古代編）』日本の美術 235, 至文堂
榎崎彰一 1989『三彩 緑釉 灰釉』普及版日本の陶磁 古代・中世篇 2, 中央公論社
榎崎彰一 1990『三彩 緑釉 灰釉』日本陶磁大系 5, 平凡社
齊藤孝正 1992「猿投窯における中国陶磁の模倣とその限界」『貿易陶磁研究』12, 49～68頁、日本貿易陶磁研究会
齊藤孝正 1993「歴史に関する基礎知識—器形と用途の変遷」『やきものの鑑賞基礎知識』125～192頁、至文堂
巽淳一郎 1998「七世紀後葉の海外交渉を物語る焼物」『明日香風』66
齊藤孝正 1998「施釉陶の展開」『カラー版日本やきもの史』38～54頁、美術出版社
榎崎彰一 1998「日本における施釉陶器の成立と展開」『日本の三彩と緑釉』6～11頁、愛知県陶磁資料館・五島美術館
愛知県陶磁資料館・五島美術館・編 1998『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館・五島美術館

[補註]

榎崎彰一は塚廻古墳出土の緑釉棺台を7世紀後半に遡る国産緑釉陶器を考える上で重要な資料として位置づけていたが[榎崎 1979 a], 今日ではこの棺台は鉛同位体比の測定結果を受けて朝鮮半島産としている。ただし、川原寺出土緑釉水波文罍や藤原京出土緑釉円面硯などは国産緑釉陶器とし、7世紀後半に日本における緑釉陶器生産の成立を再度展開している [榎崎彰一 1998]。

図版出典一覧

- 図版 1-1: 三彩壺 文化庁蔵 高 13.7cm 胴径 21.3cm 高台径 13.5cm
1-2: 三彩壺『三彩 緑釉 灰釉』(日本陶磁大系 5) 図版 25 重要文化財
倉敷考古館蔵 総高 21.3cm 口径 13.6cm 胴径 25.3cm 高台径 14.7cm
2-1: 緑釉手付瓶『日本の三彩と緑釉』図版 C-404 (猿投窯)
東京国立博物館蔵 高 21.1cm 口径 7.5cm 底径 12.3cm
2-2: 緑釉花文椀『IL GIAPPONE PRIMA DELL'OCCIDENTE』図版 145 (猿投窯)

-
- 個人蔵 高 4.1cm 口径 12.8cm
- 3-1: 三彩壺 『日本の三彩と緑釉』図版 C-313 重要文化財
東京国立博物館蔵 総高 15.7cm 口径 12.2cm 胴径 21.0cm
- 3-2: 三彩壺 『三彩 緑釉 灰釉』(日本陶磁大系 5) 図版 24 重要文化財
個人蔵 総高 16.5cm 口径 10.3cm 胴径 19.8cm 高台径 12.9cm
- 3-3: 三彩壺 『日本の三彩と緑釉』図版 C-328 重要文化財
京都国立博物館蔵 総高 22.8cm 口径 13.7cm 胴径 28.1cm
- 3-4: 三彩壺 『日本の三彩と緑釉』図版 C-310 重要文化財
大阪市立東洋陶磁美術館蔵 高 17.5cm 口径 14.3cm 胴径 24.9cm 高台径 14.7cm
- 4-1: 緑釉波文埴 (川原寺出土) 『日本の三彩と緑釉』図版 C-312
- 4-2: 緑釉獸脚円面硯 (藤原京出土) 『日本の三彩と緑釉』図版 C-311 高 6.7cm
- 4-3: 緑釉草文四足壺 (金剛峯寺真然堂出土) 『日本の三彩と緑釉』図版 C-329 (猿投窯)
総高 22.9cm 口径 7.8cm 胴径 25.8cm
- 4-4: 緑釉手付水注・椀・皿 (山王廟寺出土) 『三彩 緑釉 灰釉』(日本の陶磁古代・中世篇 2) 図版 36 (美濃窯)
重要文化財 群馬県立歴史博物館蔵
水注: 高 24.4cm 口径 7.1cm 胴径 12.8cm 底径 7.9cm
椀 (大): 高 5.9cm 口径 16.1cm 高台径 8.2cm
皿: 口径 12.8cm 高台径 6.8cm

(文化庁美術工芸課, 国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

(1999年7月6日 審査終了受理)

Transition of Green-Glazed Pottery and Tricolored Pottery in Japan

SAITO Takamasa

The glazed pottery first appeared in Japan in the latter half of the seventh century, these were green-glazed pottery. Before it was strongly believed that Nara sants'ai began to be made with the introduction of the Chinese T'ang sant'sai technique in the Nara Period at the same time with green-glazed pottery. But now it is generally believed that green-glazed pottery appeared in Japan before Nara sants'ai with the introduction of the green-glazed technique of the southern Korean Peninsula, by the green-glazed tiles excavated at Kawaharadera Temple and the green-glazed circular ink slab excavated at Fujiwara capital, these were in the latter half of the seventh century. Today it is known by the archeological excavation that Chinese T'ang sant'sai was brought to Japan by the end of the seventh century.

The oldest Nara sants'ai pottery is the small vase dated 729 excavated at Owarida-no-Yasumaro grave, but it is possible to have been made in the early Nara Period. The shapes of Nara sants'ai are derived mainly from Sue ware and Haji pottery, or metal works that were popular in Nara Period, but few are imitated directly from the Chinese T'ang sant'sai. We can understand that the Japanese newly imitated directly only the shape of Chinese ceramics that was not in Japan. In the Heian Period, Yueh kiln celadon were imported from China, and these Chinese ceramics greatly influenced the manufacture of green-glazed pottery, that was the main glaze of Nara sant'sai, like bowls and dishes. The green-glaze technique spread from the surrounding areas of Heian capital to the Sanage kilns in Aichi prefecture, Omi kilns in Shiga Prefecture, Nagato kilns and Suo kilns in Yamaguchi Prefecture. The Sanage kilns was the main that produced the highest green-glazed pottery elegantly inscribed floral pattern.



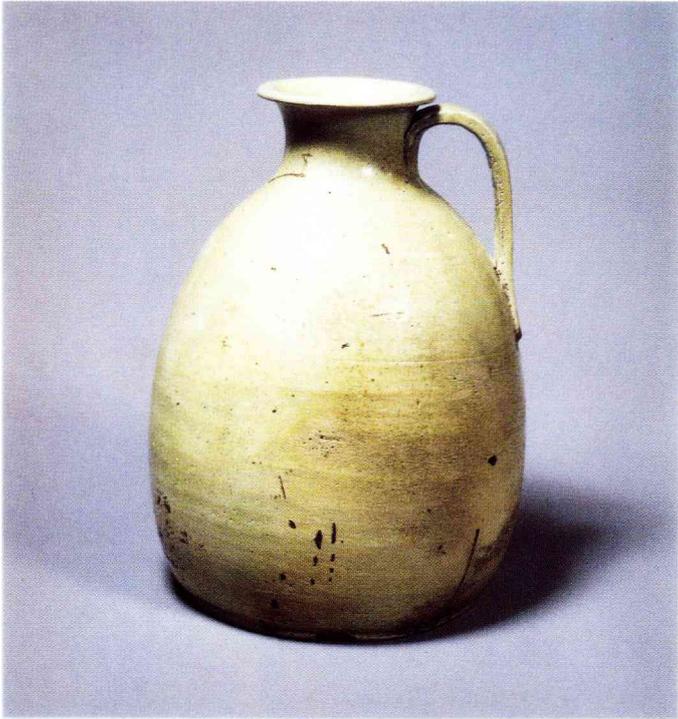
1-A 三彩壺 (文化庁蔵)



1-B 同裏



2 三彩壺 (倉敷考古館蔵)



1 緑釉手付瓶（東京国立博物館蔵）



2-A 緑釉花文椀（内面）



2-B 緑釉花文椀



1 三彩壺 (東京国立博物館蔵)



2 三彩壺



3 三彩壺 (京都国立博物館蔵)



4 三彩壺 (大阪市立東洋陶磁美術館蔵)



1 緑釉波文埴 (京都国立博物館蔵)



2 緑釉獸脚円面硯 (藤原京出土)



3 緑釉草文四足壺
(金剛峯寺真然堂出土)



4 緑釉手付水注・椀・皿
(山王麿寺出土)